

主体的に外国語を用いてコミュニケーションを 図ろうとする児童の育成を目指して —コミュニケーションを図る素地・基礎づくりを通して—

白浜町立日置小学校
教諭 川野 哲 史

【要旨】

小学校外国語活動・外国語科の目標の実現に向けて、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」を目指し、本研究では、慣れ親しみ定着させる帯活動、コミュニケーションを円滑にするポイントの提示、各時間のふり返りを取り入れた授業づくりを提案する。これら3つの手立てを取り入れた授業を行った結果、既習表現をしっかりと身に付け、自信をもって、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の姿が見られた。

【キーワード】

外国語活動・外国語科、帯活動、コミュニケーションポイント、各時間のふり返り

1 研究のねらい

平成29年3月に新学習指導要領が公示された。小学校外国語活動・外国語科の目標は、それぞれ表1のように示されている。中学年における外国語活動では、「聞くこと」、「話すこと〔やりとり〕」、「話すこと〔発表〕」の三つの領域を設定し、外国語による「聞くこと」、「話すこと」の言語活動を通して、音声面を中心とした外国語を用いてコミュニケーションを図る「素地」を育成することを目標としている。高学年における外国語科では、中学年の「聞くこと」、「話すこと」を中心とした外国語活動を通じ、外国語に慣れ親しんだ上で、発達段階に応じて、「読むこと」、「書くこと」を加えた五つの領域の言語活動を通して、コミュニケーションを図る「基礎」を育成することを目標としている。これらの目標の下に、育成を目指す三つの資質・能力が設定されている。

表1 外国語活動・外国語科の目標

※下線筆者

外国語活動（第3学年及び第4学年）目標	外国語科（第5学年及び第6学年）目標
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による <u>聞くこと</u> 、 <u>話すこと</u> の言語活動を通して、 <u>コミュニケーションを図る素地</u> となる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による <u>聞くこと</u> 、 <u>読むこと</u> 、 <u>話すこと</u> 、 <u>書くこと</u> の言語活動を通して、 <u>コミュニケーションを図る基礎</u> となる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。
知識・技能	
…省略…	…省略…
思考力・判断力・表現力等	
…省略…	…省略…
学びに向かう力・人間性等	
外国語を通じて、 <u>言語</u> やその背景にある文化に対する理解を深め、 <u>相手に配慮しながら</u> 、主体的に外国語を用いて <u>コミュニケーション</u> を図ろうとする態度を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、 <u>他者に配慮しながら</u> 、主体的に <u>コミュニケーション</u> を図ろうとする態度を養う。

三つの資質・能力のうち、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標で、外国語活動と外国語科の共通部分として「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」がある。新学習指導要領解説（小学校外国語活動・外国語編）では、外国語活動及び外国語科ともに「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成とは、単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態

度のみならず、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度を養うこと」(※1)と示されている。また、外国語学習の特質を踏まえ、技能領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、基礎的な「知識・技能」が、実際のコミュニケーションにおいて、思考・判断・表現を繰り返すことで習得され、学習内容が深まる。「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を一体的に育成するプロセスを通して、児童が主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする「学びに向かう力・人間性等」が育まれるものである(図1)。

これまで筆者は、外国語活動の指導において、児童の積極性を高めることを目標に取り組んできた。しかし、指導内容が単元内で完結してしまい、各時間や単元のつながりを生かした指導ができていなかった。その結果、自分の考えや気持ちを伝え合う活動場面で、表現が身に付いておらず、英語を話すことに消極的な児童の様子が見られた。また、話し方や聞き方といった指導を行っていなかったため、児童同士が会話する際に、主体的に友達と関わろうとする姿はあまり見られなかった。

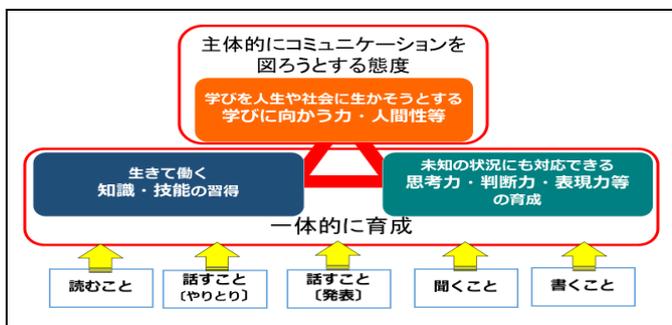


図1 育成すべき資質・能力のイメージ図

そこで本研究では、「知識・技能」を身に付け、自分の考えや気持ちなどを伝え合う「思考力・判断力・表現力等」を豊かにしていく授業づくりを通して、「学びに向かう力・人間性等」に当たる主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を目指し、研究を進めることとした。

2 研究の方法

外国語活動と外国語科では取り扱う技能や、コミュニケーションを図る素地・基礎という目標の差はあるが、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童を育成する方向性は同じであるため、外国語活動と外国語科に共通する研究内容として考えた。本研究を進めるに当たって、以下の3点を取り入れた授業づくりを行う。

(1) 慣れ親しみ、定着させる帯活動

既習表現を繰り返し使用できる機会を設けて表現を確実に身に付けるために、各授業の導入時において、継続的に帯活動を行う。本研究では発達段階に合わせて、中学年では主にチャンツ、高学年では主に Small Talk を行う。

チャンツは、リズムに乗って声を出すため、声を出すことに対する恥ずかしさを軽減し、楽しみながら繰り返して表現に慣れ親しませることができると考える。

Small Talk とは、文部科学省作成のガイドブックによると「児童が興味・関心のある身近な話題について、自分自身の考えや気持ちを楽しみながら伝え合う中で、既習表現を繰り返し使用する機会を保障し、その定着を図るために行う」(※2)活動である。また、同ガイドブックでは、発達段階に応じて、指導者の話を聞くことを中心とするもの(表2)、ペアで伝え合うことを中心とするもの(表3)の2種類が示されている。

表2 指導者の話を聞くことを中心とした Small Talk の一例(※3)

T:	I like pizza.
	What food do you like?
	I like pizza very much.
	I like cheese very much.
	Pizza is very delicious.
	Do you like pizza? Yes? Good.

表3 ペアで伝え合うことを中心とした Small Talk の一例(※4)

S1:	What food do you like?
S2:	I like watermelon.
S1:	Me, too.
S2:	It's sweet. How about you?

活動形態を変えながら、別の単元で習った表現と、前時に習った表現を組み合わせる学習内容の定着を図る。

(2) コミュニケーションを円滑にするポイントの提示

相手を意識して思いを伝えたり、話を聞いたりする態度を育てるためには、話し手が伝え方に気を付けるだけでなく、聞き手も「伝えたいことが分かった」と相手に伝わるような聞き方をすることが必要である。なぜなら、話し手と聞き手の役割は交互に入れ替わり、会話は進んでいくものだからである。

本研究では、「小学校英語教育に関する調査研究報告書」に掲載されている教育課程特例校の「相手意識を育てる工夫」及び新学習指導要領解説（小学校外国語活動・外国語編）を基に、5つのコミュニケーション

表4 5つのコミュニケーションポイント

① SMILE (話し手も聞き手も笑顔)
② FACE TO FACE (目を見て話すこと、聞くこと)
③ GESTURE (ジェスチャー)
④ CLEAR VOICE (聞き取りやすい声の大きさと話すこと)
⑤ ACTIVE LISTENING (相手が言ったことにあいづちを打つなどの積極的傾聴)

ポイント(表4)を設定する。他者との円滑なコミュニケーションのためには、④CLEAR VOICEだけでなく、①SMILE, ②FACE TO FACE, ③GESTUREなどの非言語

的要素の活用が重要である。また、⑤ACTIVE LISTENINGについては、新学習指導要領解説の「I 言語の働きの例」のうち「(ア) コミュニケーションを円滑にする働き」の中に、中学年では「挨拶をする」「あいづちを打つ」等、高学年では「呼び掛ける」、「聞き直す」、「繰り返す」等と書かれている内容を参考に発達段階に合わせて指導を行う。

(3) 各時間のふり返り

ふり返りシートに、単元全体の目標及び各時間のめあてを記載し、各時間のめあてについての達成度と、コミュニケーションポイントを意識して活動できたかについて自己評価する。特に高学年では「～ができる」という CAN-DO 形式で各時間のめあての設定を行う。このようにすることで、児童が表現の定着や目標に対する到達度を意識して活動できると考える。また、各時間のめあての達成や友達との関わりの中で、気付いたことは何かを書く活動も取り入れる。高学年では更に、十分に慣れ親しんだ単語や表現を書き写すなどの「書くこと」の活動を行い、学習内容の定着を図る。また、ふり返りを行うことによって、児童が授業を通して学んだことが蓄積され、次の活動への意欲につながるようになる。

3 所属校における授業研究

10月から11月にわたって所属校の第3学年と第5学年において、図2のとおり提案授業を実施した。教材は新学習指導要領に対応した小学校外国語教材の公表前であったため、両学年ともに現行の“Hi, friends!”を使用し、文部科学省が公表している学習指導案を参考に単元構想を行った。第3学年は外国語への慣れ親しみを主なねらいとし、第5学年では、学習内容の定着と外国語を用いて何が出来るようになるかを明確にした。なお、授業の枠組みとして、授業展開例(表5)を作成した。

○対象 第3学年(男子2名,女子5名,計7名) ○単元名 “How many?”いろいろなものを数えよう			○対象 第5学年(男子5名,女子6名,計11名) ○単元名 “I like apples.”好きなものを伝えよう		
	実施日	めあて		実施日	めあて
第1時	10/23(月)	英語で1~12までの数を数えよう。	第1時	10/26(木)	好きなものやきらいなものを聞きとることができる。
第2時	11/2(木)	英語で1~20までの数を数えよう。	第2時	11/10(金)	好きなものやきらいなものを伝え合うことができる。
第3時	11/7(火)	英語で数をたずねてみよう。	第3時	11/17(金)	好きなものをたずねたり、答えたりすることができる。
第4時	11/16(木)	英語で数を数えたり、たずねたりしよう。	第4時	11/21(火)	友だちの好ききらいを予想して、インタビューすることができる。
			第5時	11/27(月)	友だちの好きなものについて発表することができる。

図2 第3学年・第5学年の単元計画

表5 第3学年・第5学年の授業展開例

過程		第3学年 活動内容	第5学年 活動内容
導入 5分～10分	1 あいさつ	・チャンツ等を通して、単語や既習表現に慣れ親しむ。	・ Small Talk, チャンツ等を通して、単語や既習表現の定着を図る。
	2 帯活動		
展開 30分	3 めあて	・コミュニケーションポイントを意識しながら、本時の表現を使って、先生や友達と会話する。	
	4 主活動①		
	5 主活動②		
まとめ 5分～10分	6 ふり返り	・コミュニケーションポイントを意識して活動できたかを自己評価する。	・ CAN-DO 形式で設定されたためあてについて、自己評価を行う。
		・友達との関わりの中で気付いたことを書く。	

(1) 慣れ親しみ、定着させる帯活動

両学年ともに、チャンツは“Hi, friends!”を使用した。第5学年の Small Talk は主に2種類の活動を行った。図3は指導者の話を聞くことを中心とした帯活動である。既習表現の“Do you like～?”に対し、“Yes, I do. / No, I don’t.”で答えることの定着を図った。“Do you like～?”と相手の好き嫌いを問う際には、単なる既習表現の繰り返し練習に陥らないよう、興味や関心をもって尋ねることが大切だと考えた。そこで、図3のような3ヒントクイズ等を行うこととした。図4はペアで伝え合うことを中心とした帯活動である。別の単元で習った表現と、前時に習った表現を組み合わせて行なうことを意図した。これにより、単元のつながりを生かした指導を行い、既習表現の定着を図ることができると考えた。

T : **Do you like fruits?** (前時に習った表現)

S1 : **Yes, I do.**

T : Me, too. I like fruits.
It's red, inside yellow, round. (3ヒントクイズ)

What's this fruit? (別の単元で習った表現)

S2 : Apple?

T : Yes. Do you like apples, S3?

S3 : Yes, I do. I like apples.

図3 指導者の話を聞くことを中心とした Small Talk の一例 (第5学年)

S1 : **How are you?**

S2 : I'm fine.

S1 : **How are you?**

S1 : **I'm sleepy.**

I like oranges.

I like ice cream.

How about you?

S2 : I like strawberries.

I like soccer.

図4 ペアで伝え合うことを中心とした Small Talk の一例 (第5学年)

(2) コミュニケーションを円滑にするポイントの提示

授業時には、5つのコミュニケーションポイントに絵を添えて視覚的に分かりやすくしたもの(図5)を黒板に常に提示し、児童同士で会話を行う際には、再度確認させてから活動に移るようにした。継続的に提示と確認を行うことで、児童が意識して使えるようにした。話し手にとっては、「自分の思いや考えを相手に伝えよう」とするための、聞き手にとっては「相手の思いや考えを注意深く聞いて理解しよう」とするための手立てとした。

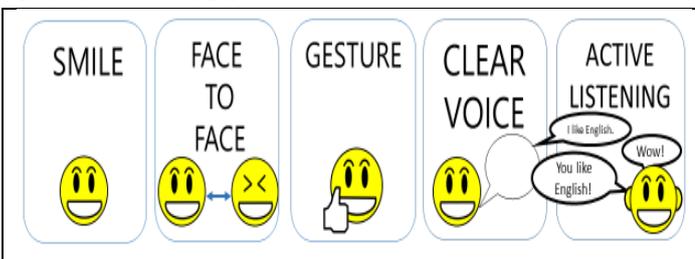


図5 児童に提示した5つのコミュニケーションポイント

(3) 各時間のふり返り

第3学年のふり返り(図6)、第5学年のふり返り(図7)ともに、授業の終わりに、めあての達成度とコミュニケーションポイントを意識して活動できたかの2点について、「めあて」「コミュニケーションポイント」の欄に、それぞれ「顔文字」で表すようにした。その後、授業を終えての感想や、友達と会話する中で気付いたことを記述させた。良い感想があれば、次時に紹介して、児童の意欲につなげた。

また、高学年では、授業で話したり、聞いたりして、十分に慣れ親しんだものについて書く活動を行った。書く活動は、デジタル教材“Hi, friends! Plus”を使用して、アルファベットの「空書き」を行った後、ふり返りシートで、「なぞり書き」と「書き写し」を行った。まず上段の薄くなった文字や単語を4線上になぞり書きし、文中の空欄には、自分の好きな単語を入れさせた。次に、下段に「なぞり書き」した文字や単語について、「書き写し」を行った。授業ごとに、段階を追って書く内容を少しずつ変えていった。第5時の書く活動では、第1時から第4時まで書いた文を、なぞり書きをせず、児童自身で書き写すこととした。

Lesson 3 ふりかえりシート

3年 名前 _____





bad good great

Lesson 3 いろいろなものを数えよう	めあて	コミュニケーションポイント	気づいたこと かんそう
1 英語で1~12までの数をかぞえよう。			
2 英語で1~20までの数をかぞえよう。			
3 英語で数をたずねてみよう。			
4 英語で数をかぞえたり、たずねたりしよう。			

図6 ふり返りシート(第3学年)

Lesson 4 ふりかえりシート

5年 名前 _____





bad good great

Lesson 4 好きなものを伝えよう	めあて	コミュニケーションポイント	気づいたこと 感想
1 好きなものやきらいなものを聞きとることができる。			I like _____ . I don't like _____ . like _____ don't like _____ .
2 好きなものやきらいなものを伝え合うことができる。			I like _____ . I don't like _____ . I _____ . I don't _____ .
3 好きなものをたずねたり、答えたりすることができる。			I like _____ . I don't like _____ . _____ . don't _____ .
4 友だちの好ききらいを予想して、インタビューすることができる。			Do you like _____ ? Do you like _____ ? _____ ? _____ ?
5 友だちの好きなものについて発表することができる。			_____ _____ _____

図7 ふり返りシート(第5学年)

4 成果・課題と今後に向けて

2 研究の方法で示した研究内容それぞれ3点の成果について、事後検証データ(表7)、事前・事後アンケート、ふり返りシート、指導者の観察から順に述べ、課題についてまとめる。

(1) 成果

ア 研究方法(1) 慣れ親しみ、定着させる帯活動

第5学年第5時で行った Small Talk では、S1に出題者として、自分の好きなスポーツに関する3つのヒントを他の児童に伝えさせた(図8)。そうすることで、他の児童はS1の好きなスポーツに関心を持ちながら“Do you like~?”を使って、尋ねることができた。またS1も“Yes, I do. / No, I don't.”と既習表現を使って答えることができていた。3ヒントクイズの出題者を代えて複数回行ったことで、既習表現の定着が図られた。その結果、同じ第5時の展開部で行った「友達の好きなもののランキングを作ろう」(図9)の活動では、ペアになって相手の好きなものについてスムーズに尋ねることができていた。これは、帯活動を行ったことが、展開部での児童同士でのコミュニケーション活動につなげることができた結果だと考える。児童にとっても、表6(1)帯活動が「英語に慣れることに役立った」を見ると、肯定的な意見が8割を超えていることや、アンケートの自由記述からも「忘れていたことを思い出せた」や「次の授業で役に立つ」など、帯活動が既習表現を身に付けることに役立っていたことがわかる。

3ヒントクイズをしてみよう!

T :Do you like sports?
 S1 :Yes, I do. I like sports.
 Ball, court, ...
 S2 :Do you like soccer?
 S1 :No, I don't.
 I don't like soccer.
 S3 :Do you like tennis?
 S1 :Yes, I do. I like tennis.

前時や、これまでに習った表現を使って尋ねたり、答えたりしている。

図8 第5時で行った Small Talk(第5学年)

友達の好きなもののランキングを作ろう

S4 :Hello. Do you like sweets?
 S5 :Yes, I do. I like sweets.
 I like chocolate very much.
 Do you like school lunch?
 S4 :Yes, I do. I like school lunch.
 I like ramen very much.

図9 第5時の展開部での活動(第5学年)

イ 研究方法(2) コミュニケーションを円滑にするポイントの提示

指導者の観察からは、単元のはじめと比べて、授業を重ねるごとに、相手の目を見て、話をする、聞くことができてきたと感じた。表6(2)コミュニケーションポイントが、「自分の考えや思いを伝える役に立った」を見ると、両学年ともに児童全員が肯定的に回答している。第5学年のコミュニケーションポイントが「自分の考えや思いを伝える役に立った」と「友達の意見を聞く助けになった」の回答と比べてみると、第5学年にとっては、コミュニケーションポイントは自分の考えや思いを伝える手立てというよりは、「話し手の話をしっかり聞こう」といった態度を養う手立てとなったと考えられる。第3学年、第5学年に行ったアンケートの自由記述から「これからも外国語で、コミュニケーションポイントを使いたい」や「英語の授業だけでなく、ちがう授業でも使いたい」といった記述も見られた。

表6 研究内容についての事後検証データ(単位%)

内容		5年	3年	3年・5年	とても	まあまあ	少しは	ぜんぜん
(1)帯活動	英語に慣れることに役立った	5年	50	30	20	0	0	0
		3年	83	17	0	0	0	0
		3年・5年	63	25	13	0	0	0
	英語を話しやすい雰囲気づくりになった	5年	30	50	20	0	0	0
		3年	50	50	0	0	0	0
		3年・5年	38	50	13	0	0	0
(2)コミュニケーションポイント	自分の考えや思いを伝える役に立った	5年	30	70	0	0	0	0
		3年	100	0	0	0	0	0
		3年・5年	56	44	0	0	0	0
	友達の意見を聞く助けになった	5年	70	30	0	0	0	0
		3年	50	50	0	0	0	0
		3年・5年	63	38	0	0	0	0
(3)ふり返り	めあてを意識して活動できた	5年	80	10	10	0	0	0
		3年	50	50	0	0	0	0
		3年・5年	69	25	6	0	0	0
	学んだことを確かめ、次の授業もがんばろうと思った	5年	30	70	0	0	0	0
		3年	83	17	0	0	0	0
		3年・5年	50	50	0	0	0	0

ウ 研究方法（3）各時間のふり返し

表6（3）ふり返しを行うことで、「めあてを意識して活動できた」を見ると、両学年共に肯定的に回答している。ふり返しシートに、単元末のゴールに向けた各授業の段階的なめあてを予め明示することで、児童とゴールを共有することができ、児童がどんな活動に取り組んでいくのか事前に知る手助けとなった。また、ふり返しを毎時間積み上げていくことで、児童が自身の成長に気付くことができた。特に第5学年は、CAN-DO形式で設定されためあてが示されていることで、目標の到達度を、より具体的に意識して活動することができた。

第3学年の提案授業では、20までの数を英語で数えることを目標としていたが、児童への自由記述のアンケートでは、「30まで英語で数えてみたいです」といった更なる学習への意欲が表れていた。第5学年においては、ふり返しシートに本時で習った単語や表現を書き写す活動を取り入れた。「ふり返しシートで英語を書く練習になった」という記述もあり、書く活動への意欲の表れも見られた。

上記3つの研究方法の手立てが複合的に作用することで、「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成が図られたのではないかと考える。

1 研究のねらいで述べたように、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、「積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度や、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとする態度」である点に注目した。そこで、提案授業の事前と事後で、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度が養えたかについて、8項目のアンケート調査を実施し、4件法で回答を求めた内容と結果を数値化（注1）した（表7）。

質問項目⑤「授業の中で、友達と関わり合おうとしている」の事後では、両学年とも増加が見られた。特に、質問項目⑥「授業の中で、英語で自分のことを伝えたいと思う」の事後では、両学年ともに0.8ポイント増加した。これらは、

積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度の表れであるといえる。

また、質問項目④「英語が使えるようになりたい」の事後結果に増加が見られた。事後アンケートには、「外国に行ったら英語を使いたい」や「外国人の友達がいるので、おしゃべりしたい」といった記述もあった。これらは、継続して外国語習得に取り組もうとする態度の表れであるといえる。

以上のことから、本研究において、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」が身に付き、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする児童の育成に繋がったと考える。

（2）課題

コミュニケーションを円滑にする5つのポイントの提示を設定したが、ACTIVE LISTENINGに関しては、相手が言ったことに「うなずきながら聞く」や「少し反応する」ことに留まっていた。第5学年については、相手の言ったことを繰り返したり、“Me, too.”

（応答），“That’s good. / That’s nice. / Really?”（感想）等の表現があることを児童に示したりする必要があった。これらの表現は、相手の話に興味をもって聞いていることの意味表現の一つであり、コミュニケーションをより円滑に行うことができる。表現を児童に

表7 事前・事後アンケート結果

第3学年 (n=7) 第5学年 (n=11)

質問項目	第3学年 (n=7)			第5学年 (n=11)		
	事前	事後	差	事前	事後	差
①英語の授業が好きである。	3.4	3.5	0.1	2.8	3.2	0.4
②英語の授業に進んで参加している。	3.6	3.5	▲0.1	2.9	3.3	0.4
③授業の内容が分かっている。	3.1	3.3	0.2	3.1	3.2	0.1
④英語が使えるようになりたい。	3.3	3.7	0.4	3.5	3.8	0.3
⑤授業の中で、友達と関わり合おうとしている。	3.0	3.5	0.5	3.0	3.4	0.4
⑥授業の中で、英語で自分のことを伝えたいと思う。	2.7	3.5	0.8	2.4	3.2	0.8
⑦授業の中で、先生や友達と話すことが楽しい。	3.4	3.8	0.4	3.4	3.5	0.1
⑧授業の中で、先生や友達と話しているのを聞くことが楽しい。	3.4	3.8	0.4	3.5	3.6	0.1

▲は差がマイナスになったことを表す

示す際には、単に表現を教えるだけでなく、指導者と児童がやり取りをする中で、指導者が意識的に繰り返し使用して、「やってみせる」ことが大切であると考えます。

ふり返りについては、毎時間のふり返りを記述させたが、友達との関わりの中で気付いたことに関する記述があまり見られなかった。改善のためには、ふり返りシートにどのような観点で書かせるのかを指導者がしっかりと意識して指導する必要がある。また、本研究においては、ふり返りシートの中に授業で習った表現を書き写す活動を設定したが、児童が書き写すための十分な時間を確保することができなかった。ふり返りに至るまでの活動の精選を行い、書く活動のための時間を確保する必要がある。

(3) 今後に向けて

「主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童」の育成を目指し、授業内でどのような手立てをすれば良いかを考え、研究に取り組んだ。児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとするために、帯活動で表現や語彙を身に付け、コミュニケーション活動で使えるようにした。「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を一体的に育成するためには、帯活動と展開部のコミュニケーション活動がつながりのあるように指導計画を練る必要がある。今後は、単元ごとの指導計画のみならず、1年間を見通した単元構想を行っていく。

また、新学習指導要領解説にもあるように、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度とは、学校教育外においても、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度も含まれる。今後、児童が日常生活の中で、初めて出会った人でも外国語で受け答えをしようとしたり、中学校、高等学校等を卒業した後も、生涯にわたって外国語を学び続けようとしたりする態度の素地・基礎の育成を小学校外国語活動、外国語科が担っている。その達成のためには、異文化に対する理解を深めさせることが不可欠である。児童が学校教育外においても、継続して外国語習得に取り組む動機付けとして、今後とも留意して指導していきたい。

<注 釈>

注1 選択肢については、「とても思う」、「まあまあ思う」、「少しは思う」、「そう思わない」の4つで行い、それぞれを順に、4点、3点、2点、1点として合計した数値を回答者数で割ったものであり、最大値は4となる。

<引用文献>

- ※1 文部科学省「小学校学習指導要領解説外国語活動編・外国語編」 p.15 (2017)
- ※2 文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」 p.84 (2017)
- ※3 文部科学省前掲書 p.132 (2017)
- ※4 文部科学省前掲書 p.133 (2017)

<参考文献>

- ・管 正隆『平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 外国語活動・外国語』ぎょうせい(2017)
- ・国立教育政策研究所「小学校英語教育に関する調査研究報告書」(2017)
- ・文部科学省「幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016)
- ・直山木綿子『小学校外国語活動のツボ』教育出版(2014)
- ・吉田研作『小学校での英語活動の意義について』(2009)